

泌 尿 器 科 紀 要

第 12 巻 第 10 号

昭和 41 年 10 月

随 想

Disadvantage for Japanese Urologists

聖路加国際病院泌尿器科医長 岡 本 重 禮

アメリカの陸軍病院の泌尿器科医が日本製の医療器械を購入したいから世話をしてほしいと、わざわざ韓国から訪ねて来たことがあった。

私はいやなことを頼まれたと思った。びっしりとタイプしてあるのは全て泌尿器科独自の医療器械であるが、その要求は細かく、どれもが日本ではつくっていないことを知っていたし、よしんば国産品で間に合うにしても、極めて不満足なものしかないことも知っていたからである。それでも念のためメーカーに電話をしてみた。案の定、私は恥かしい思いをしながら、国産品ではお役に立てないからといって彼の注文をおことわりしなければならなかった。

私がもし新興国の泌尿器科医だったら、別にはじめる必要はなかったろうし、また、その軍医もかの注文をしなかったように思う。

さて、泌尿器科学の歴史を繙いてみると、1879年 Nitze の膀胱鏡の発明に黎明を見るが、当初は Urological Instrument の進歩と共に歩んで来ている。これは尿管がひとつの管腔臓器であり、しかも体外に開口しているという特殊性から、診断においても治療においても器械を利用してアプローチしようとする自然の成り行きであったと考えてよいだろう。こうした泌尿器科医の努力が後にカテーテルを利用する動脈撮影や心臓カテーテルリズムに影響をおよぼしたことを考えると興味深いのだが、余談はさておき、事実、泌尿器科ほど Instrumentation を必要とする部門はなく、ここにまた、専門分野としての重要な意義もあるように思える。

アメリカに行ってもまず驚かされることは、これらの器械類の数が実に多く、また、その性能が非常によいことであろう。

手近な例をとれば、カテーテル、ブジーのたぐいがある。ブジーは、尿道用ばかりではない。尿管用のブジーまでそろっているのには驚かされる。尿管カテーテルの先端にしても、ざっとあげれば次のような種類がある。whistle tip, olive tip, round tip, tapered tip, bulb tip, flexible filiform tip, flexible spiral filiform tip, coudé tip, etc. しかもそれぞれに細いものから太いものまでがあるし、時には特大用の extra long 等というのを見るが、お国柄で面白いと思う反面、アメリカ人の真面目さを感じさせる。従って尿管カテーテルリズムに際してカテーテルから採尿しそこなうことなどはまずない whistle tip を用いれば尿管のどの位置においても尿を必ず採取出来る。Braasch bulb whistle tip を用いれば、たとえカテーテルが尿管の中へ挿入出来なくても腎盂尿管撮影が出来る。ま

た、分腎クリアランスを測定する際問題となる尿の leakage も # 7 whistle tip with side holes を用いればほとんど解決が出来る。これはほんの一例で全ての器械器具がこの調子なのだが、更に驚いた話をもう一つ。

先年、横須賀のアメリカ海軍病院の泌尿器科医を訪ねた際、たまたま入院中の両側尿管瘤の患者の話をした。結石を合併せず、尿管の拡張もそれ程著明でない中等度の尿管瘤に対する正攻法は Endoscopic Ureterocelectomy であるが、まず尿管カテーテルを挿入し、その上で Knife Electrode で Celectomy を行なわなければ、切開部反対側の粘膜にも損傷がおよんで狭窄を助長することがある。しかし、しばしば尿管カテーテルが挿入出来ないことがあるし、仮りに入ってもその上の部のみに切開を加えることは技術的にかなり難しい。確かそんな話をしていたところ、これを貸してやるから使ってみるといって出して来たものがある。見ると Flexible Knife Electrode なのだが、先端は Garceaw tapered tip の尿管カテーテルになっている。従って、Ureterocelectomy には最適のもの、否、Ureterocelectomy 用の Knife Electrode であったが、全く恐れ入った次第である。

それにつけても国産の Urological Instruments の種類の少なさと粗悪さは一体どうだろう。過日、あるメーカーの方が新しい TUR 用の Resectoscope を持って来てみせてくれた。その際いろいろ話してみるうちに、Cutting Loop の wire の話になったが、彼はこの道の先進国のアメリカでは wire の太さに 0.010" (No. 10) から 0.020" (No. 20) までの種類があることを知って驚いていた。しかし、wire の太さの概念もなく Cutting Loop を製造しているとすれば、一体こんな無責任なことがあろうか。メーカーにはもっと真剣に研究してもらわねばならないと思う。

国産の Foley's Bag Catheter はどこにいても評判が悪い。前立腺剔除術後には外国製の Bag Catheter しか信用して使用出来ないのは、なんとしても情けない話である。そしてまた、尿路変更後使用する畜尿器にしても国産の品物で推奨出来るものがあるだろうか。

日本泌尿器科学会は幾多の先人の努力により、研究部門にあるいは臨床部門に、よく近代医学を導入、高い水準にまで進歩発展を遂げた。しかるに国産の Urological Instrument は一向に進歩の跡を示してくれない。その証拠に私は十数年前入局した当時と同じようにきわめて粗末な、しかも高価な尿管カテーテルを使っているし、ちょっと目新しい器械は全て米国製のものを使用せざるを得ない現状である。Disadvantage for Japanese Urologists をつくづく考えさせられる。